

カルモンテル作《ブフレール伯爵夫人》
 ——18世紀後半のフランスにおけるイギリス趣味と喫茶——

船岡美穂子

序

ルイ・ド・カルモンテル（本名ルイ・カロジス、1717-1806）は、素描家、デザイナー、著述家として、18世紀後半のフランスで活躍した人物である¹。靴職人であったフィリップ・カロジスの息子として生まれ、科学と数学を修めて、最初は貴族の子どもたちの家庭教師や、戦場で地勢を扱う画家として活動した。やがてオルレアン公ルイ＝フィリップ（1725-1785）に仕え、1763年にその息子シャルトル公（ルイ＝フィリップ2世、1747-1793）の朗読係に任命されてパレ・ロワイヤルに居住した。「カルモンテル」の名は、通称である²。

オルレアン公の庇護のもとでのカルモンテルの活動は、小喜劇の執筆、庭園のデザイン、また透過性のパノラマ制作をはじめ多岐にわたるが、本稿で取りあげる1754年頃から1789年にかけて制作した、600点にのぼる水彩素描による肖像画作品は重要である³。オルレアン公一族を取り巻く人々をモデルに、いずれも約30センチ四方の小型のサイズであり、モデルを横向きでとらえた形式のものが大半を占める（figs. 1, 8, 14, 15）。また、モデルは単独である場合が多い。カルモンテルは、画家としての専門教育は受けず独学で画技を身につけた。画業を生業としないアマチュア画家として、旧体制期の貴族や軍人、重要な啓蒙思想家や学者、芸術家の姿を描いた肖像画作品は、オルレアン公の宮廷に出入りする人々の社交の折の楽しみや気晴らしのためのものであった。販売されることはなく、求められた際に模写画を作って贈ることはあったが、オリジナル作品は手元に置き、コレクションとしてまとめていた。フランス革命を経て困窮したカルモンテルの死後、一連の肖像画作品は散逸の危機に瀕し、現在も美術館や個人といった複数の所蔵先で分蔵されているものの、近年のカタログ・レゾネによれば、総数600点のうちの465点はコンデ美術館に収められている⁴。

確かにカルモンテルは職業画家ではなかったが、その作品はよく知られていた。フリードリヒ・メルキオール・グリム（1723-1807）もまたオルレアン公のもとで尚書局長を務めたが、彼の証言によれば、「カルモンテルには、人物像の雰囲気と物腰、エスプリをたっぷりとつかみ取る才能がある。彼の作品集の中でしか見たことなかった人物たちに、日々見覚えを感じるほどである」⁵と述べており、同時代からその肖似性が評価されていたことがうかがわれる。近代の研究史においては、美術史的な立場から、しばしば「美術作品としては、アマチュア画家による二流の質」⁶とも評されるが、「慎重深くも粘り強い目撃者」⁷として、18世紀後半期のフランスの社交界の忠実なイメージを伝えていと評価されてきた。こうした特質ゆえに、歴史学や文化史の分野において史料として扱われることも少なくない。

本稿では、喫茶する姿で描かれた肖像画《ブフレール伯爵夫人》（シャンティイ、コンデ美術館、fig. 1）を取り上げる。1760年の年記が書きこまれており、カルモンテルの肖像画作品の中では比較的初期にあたる。緑の木々の茂る屋外を臨む柱廊を思わせる場所で、白いドレスを着たブフレール伯爵夫人、マリー＝シャルロット・イポリート・ド・カンペ・ド・ソージョン（1724/25-1800）が肘掛け椅子に腰かけている。プロフィールの全身像を単独でとらえて描く形式は、カルモンテルによる他の多くの肖像画作品と共通するものである。筆者が行った作品調査によれば、極めて細部まで繊細に描写されていることが観察された。顔貌は細いグ

ラファイトの描線で繊細にとらえられ、淡い灰色で着彩された部分と、紙の地色を残した部分の効果を巧みに生かして、白いドレスのドレーパリーと光沢が表現されている。とりわけテーブルの上の茶器は、観者によく見えるように配置され、丹念に描写されていることがわかる (fig. 3)。

先行研究においては、まず、1902年にグリュイエが、コンデ美術館所蔵の肖像画作品のカタログを編纂し、基礎研究を築いた。丁寧なディスクリプションとともに、本作品に付されたタイトルと年記をもとにモデルを同定し、簡略ながらブフレール伯爵夫人の経歴を紹介した⁸。一方、近年では18世紀のヨーロッパで親しまれた嗜好品とその絵画表現への関心が高まり、こうしたテーマによる展覧会が開かれ、本作も言及されている⁹。特に、2008年に開かれた展覧会「ブーシェとシャルダン、近代様式の画家たち」の図録の中でイートウェルは、フランスで喫茶の絵画表現が少ないことを指摘するとともに、「デジュネ」と呼ばれる陶磁器製の一人もしくは二人用の小さな茶器のセルヴィスが1753年にセーヴル磁器製作所で考案されたことに着目し、この流行の形式と結びつけて、本作を一人で喫茶を楽しむ個人的な思索にふける女性像として解釈した¹⁰。ただし、描かれたティーセットの具体的な同定は行っていない。イートウェルは一方、サロンの情景に取材した《パリ、タンブル宮の四面鏡の間でのイギリス風茶会》(fig. 12)については、イギリス趣味との結びつきを論じた。しかし、いずれも喫茶場面としてブフレール伯爵夫人の姿が描かれながらも (fig. 13)、カルモンテルの作品についてはイギリス趣味の直接的解釈を行っていない。すなわち、《ブフレール伯爵夫人》(fig. 1) が描かれた当時の夫人の状況、イギリス趣味との関係、そして画面に配置された喫茶道具がいかなるものであるのか、といった問題をめぐる詳細な研究は充分になされていない。筆者が現在調査した限りにおいて、カルモンテルによる肖像画作品の中で、こうした喫茶と思われる場面が選択されたものは数点にとどまることから、本作は特殊な場面設定と見なすことができる。

本稿は、カルモンテルによる肖像画《ブフレール伯爵夫人》について、1760年頃のブフレール夫人をめぐる状況、彼女のイギリス文化との接触を考察し、「イギリス趣味」とのつながりを明らかにするとともに、画中の喫茶道具のモチーフの同定を検討するものである。

1. 1760年のブフレール夫人をめぐる状況

ブフレール伯爵夫人の人物像と経歴についてまとめておきたい。彼女は、シャルル＝フランソワ・ド・カンペ＝ソージョン伯爵の娘として1724年もしくは25年にルーアンで生まれた。1746年にエドゥアール・ド・ブフレール＝ルヴェレル伯爵との結婚により、ブフレール伯爵夫人となった¹¹。だがまもなく夫と不和となり、オルアン家のルイ・フィリップの夫人ルイーゼ・アンリエット・ド・ブルボン＝コンティ(1726-1759)付きの女官となった。やがて、夫人の生涯に大きな転機が訪れる。シャルトル公夫人を通じて、その兄にあたるコンティ公ルイ＝フランソワ(ルイ＝フランソワ・ド・ブルボン、コンティ公、1717-1776)と知り合い、まもなく1751年には愛人になったことである。コンティ公は、美術愛好家としても知られる王族であり¹²、ブフレール伯爵夫人はその著名なサロンのホステス役を務める、「タンブルのアイドル」、「学識あるミネルヴァ」として名を馳せた。夫人は、文芸への関心が高く、グリム、プレヴォー師、ドニ・デイドロ、ジャン＝ジャック・ルソーといった文筆家や学者たちを迎え入れた。さらに、その交友はフランス国内にとどまらず、スウェーデンのグスタフ3世にまで広がった。とりわけイギリスびいきで知られ、イギリスのデイヴィッド・ヒュームやホレス・ウォルポールと交流し、1763年と1765年には実際にイギリスに渡航したことは注目すべきである。やがて、1764年に夫が死去して未亡人となったことを機に、コンティ公との結婚を望んだとされるが、その希望は叶

わぬまま、1776年にコンティ公は死去した。以後、1789年までオートウイユに遁世し、革命後は故郷のルーアンで1800年に歿した。

しかしながら1752年、コンティ公の愛妾となって間もなかったブフレール夫人が、同年にオルレアン公の地位を継承するルイ＝フィリップによって、追放されていたことは看過できない。その原因となったのは、ブフレール夫人がオルレアン公妃にあまりに接近し、メルフォート公との恋愛関係をとりにったことであったという¹³。以後ブフレール夫人はコンティ公のもとに身を寄せてタンブルへと落ち着くことになる。後年オルレアン家と和解したのか、あるいは関係修復がなされたとしても、その詳細な時期さえ不明である。一方、「タンブルのアイドル」となった夫人とイギリス趣味のつながりに目を向けるならば、ヒュームと知己を得たのが1761年、最初の渡英は1763年のことであった。タンブルのサロンでイギリス風茶会を主宰する女主人としての姿は、先述のように1764年のものである(fig. 13)。すなわち、《ブフレール伯爵夫人》に描かれた1760年におけるオルレアン家と夫人との関係、そしてこの喫茶の情景がイギリス趣味によるものであるのかどうか不明である。

ここで、コンティ公をめぐる状況に目を転じてみよう。コンティ公は、国王のもとで軍功をあげて政治の舞台で活躍していたものの、やがてボンパドゥール夫人から疎まれて1757年にはヴェルサイユを退くことを余儀なくされた。政治から離れたコンティ公は、タンブル宮殿を整備して居住し、オルレアン公やコンデ公と同様に、貴族や学者、芸術家を集めたサロンでの知的生活へと注力することとなった。特にその念頭にあったのは、緊密であると同時に対抗的な関係にもあったパレ＝ロワイヤルのサロンであったと言われている¹⁴。1732年に妻を失くしていたコンティ公にとって、サロンを主宰する女主人が必要で、ブフレール夫人が適任であったことは想像に難くない。1760年代から、コンティ公は国王の宮廷内外の貴族を招く夜食会を開いたことでも名高く、そこに招待されることが社交界の人々にとって榮譽とされるようになった。

こうした環境の中で、1759年からルソーを支援してコンティ公に紹介するなど、文化の庇護者としてのブフレール夫人の存在感は無視できないものとなっていた。加えて、オルレアン家追放の遠因となったと目されるオルレアン公妃が、本肖像画制作の前年の1759年に死去したことも少なからぬ契機となったと筆者は推測する。追放から8年の歳月を経て、公式の愛妾として広大なタンブル宮殿の中にあるサン・シモン館、リラ・ダンの城館を与えられることになる35歳のブフレール夫人は、パレ＝ロワイヤルに比肩するほどに成長しつつあるサロンの女主人としての地位を築いていた。カルモンテルの肖像画作品の大部分は、オルレアン公の城館で描かれたとされる¹⁵。ブフレール夫人の背景に描かれた柱廊や庭園もまた、同じ環境である可能性が高い。そのことは、オルレアン公の愛妾を描いた作品中に同じ肘掛け椅子とケトルが見られることから確かめられよう(fig. 15)。何よりも、オルレアン公お抱えのカルモンテルにこの肖像画を描かせた事実そのものが、1760年に夫人が同家を訪問するような機会があったことを示している。このことから、彼女が1760年にオルレアン公の宮廷を訪れて、カルモンテルに肖像画を描かせ得る友好的な関係にあったと考えることができる。

2. イギリス趣味と喫茶

次に、この作品にイギリス趣味がどの程度反映されていると解釈できるだろうか。喫茶の習慣について言えば、フランスでは、17世紀にもたらされた異国の嗜好飲料であるコーヒーやチョコレートが愛好されたこととは対照的に、茶はそれほど普及しなかったことも相まって絵画作品に喫茶場面が描かれることは少ない¹⁶。

だが、フランスに茶がもたらされた17世紀半ば頃には、中国を想起させる異国趣味と結びついていた喫茶は、18世紀後半になると今度は「イギリス趣味」とつながりのある習慣として流行するようになった。イギリスとの関係が深かったり、イギリス思想に関心を持ったりした人々の間で、召使ではなく女主人ないし銘々が手ずから茶を入れるというイギリス流の作法とともに流行したのであった。ブフレール夫人がホステス役として登場する1764年のサロンの盛況を描いた先述の《パリ、タンブル宮の四面鏡の間でのイギリス風茶会》(fig. 12)は、まさに画題が示すとおり流行の典型として解釈されてきた。「イギリス趣味」とは、イギリス文化に感化され、思想や学問から、衣装や食品といった生活様式・習慣にいたるまで影響を受けた現象を指し、フランスで18世紀半ば頃から見られた¹⁷。早くはヴォルテールによる『哲学書簡』(1734)にみられるとおりの啓蒙思想の波及に端を発するものだが、広く普及しはじめたのは七年戦争終結後の1760年代半ばからであり、特に大貴族にまで広がったのがルイ16世治世にあたる1770年代半ば以降であった¹⁸。ちなみに、「イギリスかぶれ *anglomanie*」という言葉の初出は、1754年のグリムによる『文芸通信』である¹⁹。否定的意味を含まない現在の「イギリス趣味 *anglophile*」という言葉は、1829年以降になってから生まれたものである²⁰。以上を踏まえて本稿では、ブフレール夫人が無批判な流行の追随者ではなく、イギリスの啓蒙思想に専ら造詣があり、むしろその先駆であったことに鑑み、「イギリスかぶれ」との訳語ではなく「イギリス趣味」を用いることにしたい。

《ブフレール伯爵夫人》(fig. 1)に、イギリス趣味や彼女のサロンでの活躍が反映されているという解釈はなされていない。《パリ、タンブル宮の四面鏡の間でのイギリス風茶会》(fig. 12)の場合とは異なり、画題に明確に示されていないことに加え、1760年という時期がイギリス趣味の流行の盛期よりも早いことが理由として推察される。しかしながら、600点にもものぼる肖像画作品に喫茶を描いたものは数点しかないこと、また、この画家が描くモデルの周りには、その経歴や特徴を示すモチーフや活動が描写される傾向が多く認められることから、喫茶が選択されたことは偶然ではなく、上述のような解釈が可能であると考えられる。

まず興味深いことに、近年の別の研究から、ブフレール夫人が1757年刊行のイギリスの日刊紙『スペクテイター』の書籍版を所有していたことが判明している²¹。道徳観念や啓蒙思想が反映された同紙は、ロンドンを中心としたイギリスの風俗習慣が議論され、まさに「喫茶を含む社交の場での会話やマナーの習得」を目指したものであった。これは、タンブルでのサロンとの関連を十分に推測させるものであり、ブフレール夫人はこうした刊行物を通じて定期的にイギリス社会や文化に関する情報を入手し、早くも1760年には自らのサロンにイギリス趣味を取り入れようと企図していたと考えることは可能であろう。さらに、イギリスへの滞在経験で喫茶の習慣を身につけたミルボワ夫人²²が、彼女のサロンに出入りしており、茶の飲み過ぎを揶揄されたほどであったという。確かに1760年は七年戦争のさなかであったとは言え、王室と競合ないし敵対関係にあるオルレアン公やコンティ公と親密であり、夫人自身も同じ理由からヴェルサイユへの参内が生涯ただ一度だけであったこと、さらに翌年にはヒュームと文通を開始したことに鑑みても、既にこの頃にイギリス文化に傾倒していた可能性は高い。思想やモードに見られるイギリス趣味は、しばしば反王室の立場と親和性が高いことも示唆的である²³。

描かれたブフレール伯爵夫人の周囲に配置されたモチーフにもイギリス趣味が看取できるだろう。夫人の前には、脚が一本で天板が円形のティーテーブルが置かれている。フランスでは、通常軽食や飲み物を置く際には、サイドテーブルを用いるのが主流であったが(fig. 8)、イギリス風の喫茶の流行に伴い、円形で一本の脚からなり、天板が折りたたみ式のイギリス製のティーテーブルが輸入されたり、フランスでそれ

を模倣製造したりしたものが1760年代までに出回っていたことが判明している (fig. 6)²⁴。そのテーブルの上で、アルコールランプを使ってケトルでお湯を沸かし、ポットを用いて茶を入れたという (fig. 7)²⁵。残念ながら、脚の先が三本に分かれているかどうかは隠れていて見えないものの、その形状からイギリス式である可能性は高い。

次に、夫人の足元にある、3つの円筒状のものを収めた横長の蓋付きの箱に着目したい (fig. 4)。このモチーフはこれまで看過されており、管見の限りまったく言及されてこなかった。そこで本稿では新たに、その形状から3つの茶筒を収めた茶入れである可能性を指摘したい²⁶。イギリスでは、貴重な茶をこうした茶筒に収め、しばしば錠前付の箱に入れて保管する習慣があった (fig. 5)²⁷。画中の箱にも、確かに錠前がついていることが見てとれ、夫人が当時貴重であった茶葉を、おそらく3種類も贅沢に揃えて楽しんでいたことがうかがわれる。

本作においては、イギリス式のティーテーブルとケトル、贅沢な茶入れを揃えた喫茶場面が意図的に選択され、タンブル宮のサロンの女主人となりイギリス文化の影響下にあったブフレール夫人の一種のアトリビュートとして機能していると言える。

既述のとおり、カルモンテルは肖像画作品を描く際に、その人物の特徴や身分・職業を示すモチーフや場面を選ぶことが少なくない。1768年に、『ブフレール夫人とテレーズ』 (fig. 14) において、夫人は再びカルモンテルの前にモデルとして姿をあらわす。貧しい中産階級の家から引き取った娘テレーズを前に、歳を重ねた夫人が、朗読の練習ないしは読み聞かせをしている情景である。先述のとおり、夫人は1759年以来ルソーを熱心に援助し、1762年に刊行された『エミール』の最初の「ファン」になった²⁸。ここに、新しい教育論に傾倒した啓蒙的な彼女の姿が繊細に活写されるとともに、同様にオルレアン家との融和した関係をも見てとることができよう。

3. フランス製の磁器のティーセット

最後に、喫茶の道具の主演であるティーセットに注目したい (fig. 3)。テーブルに置かれているのは、先述のケトルの他に、ティーポット、一客のカップとソーサー、蓋を開けた砂糖壺である。これらはいずれも白地に青色の模様があり揃いの陶磁器であるように見るとおり、グリュイエは、「フルセットの茶器」と作品記述し、さらにイートウェルは「フランス製の磁器」とした²⁹。だが、それ以上の詳細な検討や同定は行われていない。

では、ティーセットが少なくともフランス製であるとするならば、具体的にはどの窯の製品に近いだろうか。明言を避けてはいるものの、18世紀フランスの軟質磁器の専門家ル・デュックが、サン=クルー窯の陶磁器を論じた箇所を参考図版として本作『ブフレール伯爵夫人』を大きく掲載したことは、本稿にとって示唆的である³⁰。フランス最古を誇る軟質磁器製作所である同窯は、オルレアン公の城館に近いサン=クルーにあり、ルイ14世の弟オルレアン公フィリップ1世から摂政オルレアン公フィリップ2世の時代に至る18世紀前半までは、その庇護下に置かれていた。当然ながらオルレアン家は代々、その製品を数多所有して実際に使用しながら愛好した³¹。ここで、同一のデザインではないものの、18世紀前半期に作られた実際のサン=クルー窯のカマイユ・ブルーのカップとソーサー、ティーポット、砂糖壺の類例と比較してみよう。白地に青い模様の装飾、カップの下3分の1ほどの高さまで隠れる深いソーサー、砂糖壺の蓋の形態も、よく似ているように見える (figs. 3, 9-11)。筆者による観察、そして陶磁史の専門家の意見を踏まえるならば、同家と縁の深

い 18 世紀前半期のサン＝クルー窯の磁器である可能性が高いと考えて良いだろう³²。

次に、茶器の形式を考察したい。よく似た特徴を持つ器物が、他の複数のカルモンテルによる肖像画作品 (fig. 8) に確認できることから、この白地に青い模様の磁器は、オルレアン家で所有された揃いのものであったと推測できる³³。一般にフランスでは、18 世紀前半期まで、食器は一揃いとしてよりも、制作期も窯元も異なるものを自由に組み合わせる傾向にあり、後半期以降になって陶磁器生産の発達とともに、統一したデザインによるセルヴィスがよく製造され用いられるようになったという。茶器について言えば、「デジュネ」と呼ばれる 1 人ないし 2 人のごく少数向けに小さなセットが、1753 年にセーヴル窯で考案されたことは確かに重要である。イトウエルはブフレール夫人が一人で喫茶を楽しんでいる点に注目し、同時期の少数人数用セルヴィスの形式との結びつきを示唆した³⁴。

しかしながら一方で、軽食や酒、コーヒー、茶といった飲み物のための、古くからある揃いの食器のセルヴィスも「デジュネ」あるいは「キャバレ」と呼ばれており、1753 年に考案された少数人数向けのセルヴィスとの呼称の定義を区別することは実は難しい³⁵。サン＝クルー窯では、1700 年以來、揃いの器物からなる「キャバレ」が作られた。一例を挙げるならば、摂政オルレアン公は「すべて青と白の磁器の」4 客のカップとソーサー、砂糖壺からなる「キャバレ」を実際に所有していた³⁶。ブフレール夫人もまた、この伝統的なサン＝クルー窯の「キャバレ」のセルヴィスを使っているのではなかろうか。すなわち、彼女は 1760 年頃の最新の一人用のティーセットではなく、およそ 30 ～ 50 年も前の 18 世紀前半期の古めかしいティーセットをあえて使用していることになる。

あらためて観察するならば、4 つの茶道具は、慎重に互いに重なり合わないようにして、形状と装飾模様が観者によく見えるよう意図的に配置されているように見える (fig. 3)。カルモンテルによる肖像画作品の大部分は、オルレアン公の城館を舞台としており、心地よいテラスやサロン、手入れされた瀟洒な庭園といった情景は、モデルとなった人物を包み込むように描かれている。たとえその姿が見えなくとも、場を与えている主人オルレアン公の存在を至るところに濃密に感じさせるものである (figs. 1, 8, 14, 15)。あくまでも推測の域を出ないにせよ、彼女が手にした古風な茶器は、摂政の庇護下にあった伝統ある磁器を誇るとともに、その時代を懐古しているのかも知れない。

ブフレール伯爵夫人は、コンティ公の宮殿の私室にいるのではない。つまり、イトウエルが指摘したような孤独な読書と思索をとまなう私的な喫茶の情景というよりも、1760 年にオルレアン家に厚くもてなされた、イギリス趣味を嗜むタンプルのアイドルとしての姿と解釈すべきであろう。

結

カルモンテルは、《ブフレール伯爵夫人》において、40 センチほどの小品ながら、35 歳の知的な夫人の容貌の特徴を細やかに描いた。研究史においては、1760 年の夫人の境遇、喫茶場面が選択された理由やイギリス趣味とのつながり、描かれた喫茶道具の詳細も明らかにされてこなかった。

本稿では、オルレアン家とコンティ家のつながりと両サロンの競合関係、イギリス文化に造詣のある人物や刊行物との夫人の接触、タンプル宮でのイギリス風茶会で知られるサロンの女主人としての役割を検討し、画中に描きこまれたイギリス風喫茶を示す調度品やフランス製磁器もあわせて考察を進めた。

その結果、まずブフレール夫人が早くも 1760 年にはイギリス趣味の先鞭をつけて広めた人物の一人として描写された可能性を示すことができたと考える。ここで、カルモンテルによる《庭園でお茶を飲むモンテッ

ソン侯爵夫人、デュ・クレスト侯爵夫人、ダマ伯爵夫人》(パリ、カルナヴァレ美術館、fig. 15)を見たい。1773年の年記が示すとおり、ドレスや髪型のファッションは《ブフレール伯爵夫人》とは異なる。丸い銀灰色のティーケトル、緑の格子模様の肘掛け椅子はここでも使用される一方、豪華なティーセット³⁷を載せているのは、さらに凝ったデザインのイギリス風ティーテーブルである。まさにイギリス趣味の最盛期の頃の茶会風景を示す品である。ホステス役を務めているらしいモンテッソン夫人³⁸は、ブフレール夫人のサロンに以前から出入りしていた女性であり、ちょうどこの年にオルレアン公と貴賤結婚を果たした愛妾でもあった。ブフレール夫人の及ぼしたイギリス趣味の影響と隆盛ぶりをここにも認めることができよう。

次に、《ブフレール伯爵夫人》の画中の磁器について言えば、従来フランス製とされていたが、オルレアン家の庇護にあった時代のサン=クルー窯の茶器である可能性が高く、同家に手厚く迎えられた夫人の姿を示すものであったと考えられる。4年後にモーツァルトが訪れた際に夫人がホステスを務めたイギリス風茶会の情景(fig. 12)では、大がかりな茶器のセルヴィスが描かれているが、これはフランス陶磁、おそらくはセーヴル磁器ではないかと推測されている³⁹。つまり、両作品に描写されたイギリス風喫茶の情景を観察する限りにおいては、興味深いことに、イギリス製の茶道具や家具、作法を取り入れながらも、磁器はフランスの誇る自国の製品を用いていたことがわかる。書物を手にして思索にふける姿が文芸の庇護者としての個性を表すとともに、洗練されたイギリス趣味の喫茶とフランス製磁器のティーセットが、オルレアン、コンティの両家と縁の深いブフレール夫人のアトリビュートとしても機能しているのである。カルモンテルの作品は、2時間ほどで、つまり即興のようにして制作されたと言われているが⁴⁰、本稿で行った作品分析からはその背後に細やかな構想と創意があったことが推測されるのである。

* 付記：陶磁器や喫茶道具の同定の試みにおいて、愛知県陶磁美術館学芸員長久智子氏、ボウズ博物館(ダーラム)陶磁部門学芸員ハワード・ケーツ氏より、ご意見とご教示を賜ったことに心より謝意を表します。本稿は、平成26-29(2014-2017)年度科学研究費補助金・若手研究(B)(研究課題番号:26770050)による研究成果の一部です。

註

- 1 Louis de Carmontelle (Louis Carrogis). 経歴は以下。JAL, Augustin, *Dictionnaire critique de biographie et d'histoire : errata et supplément pour tous les dictionnaires historiques d'après des documents authentiques inédits*, Paris, 1872, p. 317. カルモンテルの主要なモノグラフィーは以下。BRANCION, Laurence Chatel de, *Carmontelle au jardin des illusions*, Château de Saint-Rémy-en-l'Eau, 2003; GRUYER, François-Anatole, *Les portraits de Carmontelle : Chantilly*, Paris, 1902; MIERRAL-GUÉRAULT, Jacqueline, «L'Œuvre pictural de Carmontelle», *Positions des thèses des élèves de l'École du Louvre, 1948-1952*, Paris, 1956, pp. 301-308.
- 2 ミエラル=ゲローが指摘するように、本名ではなく通称を名乗ることによって、慎ましい出自を隠していたようである。MIERRAL-GUÉRAULT, *op. cit.* カルモンテルの生い立ちや教育環境は以下で論じられた。BRANCION, *op. cit.*, pp. 15-24.
- 3 肖像画作品のカタログは、以下に掲載された。プランシオンによる最新のモノグラフィーでは現存する600点がまとめられた。グリュイエによる作品目録は、コンデ美術館所蔵作484点に限られているが、人物の経歴とともに詳細に記述された。BRANCION, *op. cit.*, pp. 222-231; GRUYER, *op. cit.*
- 4 BRANCION, *op. cit.*, pp. 222-231.
- 5 *Correspondance littéraire, philosophique et critique : adressée à un souverain d'Allemagne*, Depuis 1753 Jusqu'en 1769, par Le baron de GRIMM et par DIDEROT, Première partie, t. 4, Mai 1763, Paris, 1813 [以下、*Correspondance* と略], p. 363.
- 6 MIERRAL-GUÉRAULT, *op. cit.*, p. 306.
- 7 BRANCION, *op. cit.*, p. 12.
- 8 GRUYER, *op. cit.*, n° 220.
- 9 EATWELL, Ann, «Tea à la Mode : The Fashion for Tea and the Tea Equipage in London and Paris», dans: *Cat. exp., Boucher & Chardin, Masters of Modern Manners*, University of Glasgow, Hunterian Art Gallery, 2008, pp. 50-76.



fig. 1 カルモンテル、《ブフレール伯爵夫人》1760年、グラファイト、グワッシュ、サンギース、水彩、31.5×19 cm、シャンティイ、コンデ美術館



fig. 2 タイトルと年記 (fig. 1 の部分図)



fig. 3 ティーセット (fig. 1 の部分図)



fig. 4 足元に置かれた箱 (fig. 1 の部分図)



fig. 5 《3点の茶筒をいれた箱》、1760年頃、木材、銀鍍金の銅板、漆、高さ(箱) 21.5 cm、ウェルベツト、ダラム、ボウズ美術館



fig. 9 《カップとソーサー》、1710年頃、サン・クルー窯の軟質磁器、パリ、セーヴル陶磁器美術館



fig.10 《ティーポット》、1700-1710年頃、サン・クルー窯の軟質磁器、ロンドン、ヴィクトリア&アルバート美術館



fig.11 《砂糖壺》、1696-1710年、サン・クルー窯の軟質磁器、パリ装飾美術館



fig. 6 《押し上げ式のゲリドン》、年代・サイズ不明、木材、ジョゼフ・キャナバス銘、クリスティーズ



fig. 7 《台付ケトル》、ウィリアム・アーチドール銘、1717-1718年、高さ32.7cm、銀、象牙、ボストン美術館



fig. 8 カルモンテル、(逸名の婦人)、制作年不明、グラファイト、グワッシュ、サンギーヌ、水彩、31.5×19cm、シャンティイ、コンデ美術館



fig. 12 ミシェル＝バルテルミー・オリヴィエ、《パリ、タンブル宮の四面鏡の間でのイギリス風茶会》、1766年、個人蔵



fig. 13 ブフレール伯爵夫人 (fig. 12の部分図)



fig. 14 カルモンテル、《ブフレール伯爵夫人とテレーズ》1768年、グラフィット、グワッシュ、サンギース、水彩、31.5×19 cm、シャンティイ、コンデ美術館



fig. 15 カルモンテル、《庭園でお茶を飲むモンテッソン侯爵夫人、デュクレスト侯爵夫人、ダマ伯爵夫人》1773年、サンギース、鉛筆、水彩、34.2×23.2 cm、パリ、カルナヴァレ美術館

10 *Ibid.*

- 11 プフレール夫人の生涯と経歴は以下を参照。D' HOEFER, *Nouvelle biographie générale : depuis les temps les plus reculés jusqu'à nos jours, avec les renseignements bibliographiques et l'indication des sources à consulter*, publiée par MM. Firmin Didot Frères sous la direction de M. le D' Hoefer, t. 1, col. 903-904, Paris, 1852 ; SCHAZMANN, Paul-Émilik, *La Comtesse de Boufflers*, Paris, 1933.
- 12 コンティ公の文化的活動を中心とした近年の主要な研究は、以下。Cat. exp., *Les trésors des princes de Bourbon Conti*, L'Isle-Adam, musée d'Art et d'Histoire Louis-Senlecq, 2000; BUSSMANN, Frédéric, (Traduit de l'allemand par) Kaufholz-Messmer, Eliane, *Un Prince collectionneur Louis-François de Bourbon Conti et ses collections au palais du Temple à Paris*, Paris, 2012.
- 13 1752年1月25日に起こった事件とされる。SCHAZMANN, *op. cit.*, pp. 14-15.
- 14 コンティ公の政治的状況とサロンへの注力は以下を参照。BUSSMANN, *op. cit.*, pp. 59-70.
- 15 冬はパレ=ロワイヤル、夏はサン=クルーで過ごしており、作品の舞台もそれらの城館であると推測される。BRANCION, *op. cit.*, pp. 47-54.
- 16 フランスでの喫茶の歴史は以下を参照。KRIKORIAN, Sandrine, *À la table des Élités. Les repas privés en France de la Régence à la Révolution*, Aix-en Provence, 2013, pp. 28-34. 絵画表現は以下で論じられた。EATWELL, *op. cit.*; 吉田朋子、「コーヒーお茶・チョコレート——シャルダン『お茶を飲む婦人』」、「感覚のラビュリントゥス II 味覚のイコノグラフィア、蜂蜜・授乳・チョコレート」、*ありな書房*, 2012年、183-213頁。
- 17 VIGUERIE, Jean de, *Histoire et dictionnaire du temps des lumières*, Paris, 2007, pp. 710-711.
- 18 VIGUERIE, *op. cit.*
- 19 « Anglomanie », dans ; *Dictionnaire culturel en langue française*, sous la direction de Alain Rey, direction éditoriale, Danièle Morvan, t. I, Paris, 2005, p. 327. 18世紀に刊行された辞典として、管見の限りでは1787年刊行の以下のものによりよく掲載された。FÉRAUD, Jean-François, « ANGLOMANE », dans; *Dictionnaire critique de la langue Française*, t. I, Paris, 1787 (réimprimé, Tübingen, 1994), p. 112.
- 20 *Ibid.*
- 21 BUSSMANN, *op. cit.*, p. 371, note 154. 2002年11月29日、パリで開かれたクリスティーズのオークションに、プフレール夫人の紋章入りの赤い皮革装丁の1757年版『スペクテーター』が出品された(オークション番号5021、ロット番号33)。
- 22 アンヌ=マルグリット=ガブリエル・ド・ボーヴォー=クラオン(1707-1792)。外交官であった夫とともに、1749年から少なくとも1755年以前まではロンドンに滞在していた。EATWELL, *op. cit.*, p. 70.
- 23 ただ一度の訪問とは、義父の死去の折であったという。イギリス趣味と反王室は、以下参照。DUMORTIER, Claire et HABETS, Patrick, *Porcelaine de Tournai : Le service d'Orléans*, Bruxelles, 2004, pp. 31-34.
- 24 SARGENTSON, Carolyn, *Merchants and Luxury Markets. The Marchands Merciers of Eighteenth-Century Paris*, London, 1996, p. 118.
- 25 *Ibid.*, pp. 60-61; 展覧会カタログ、『紅茶とヨーロッパ陶磁の流れ』、名古屋ボストン美術館、2001年、16頁。
- 26 このモチーフを茶入れとすることについて、fig. 5に掲載した茶入れを所蔵しているボウズ博物館(ダラム)陶磁部門学芸員ワード・クーツ氏より、賛同のご意見とご助言を賜った。描かれた円筒形のモチーフについて言えば、これによく似た装飾のない無地の金属製の茶筒が以下の文献に掲載されている。RONDOT, Bertrand, *Discovering the Secrets of Soft-Paste Porcelain at the Saint-Cloud Manufactory ca. 1690-1766*, New York, 1999, cat. 216, pp. 250-251. しかし、通常は卓上で用いるはずの貴重な茶入れが奇妙なことに足元に配置された理由は不明である。
- 27 EATWELL, *op. cit.*, pp. 60-61.
- 28 SCHAZMANN, Paul-Émilik, «La comtesse de Boufflers, Première adepte d' "Emile" d'après des documents inédites», *Revue d'histoire littéraire de la France*, vol. 44, n°3, 1937, pp. 403-407.
- 29 GRUYER, *op. cit.*, n° 220 ; EATWELL, *op. cit.*, p. 69.
- 30 LE DUC, Geneviève, *Porcelaine tendre de Chantilly au XVIII^e siècle*, Paris, 1996, p. 312.
- 31 同窯の歴史は以下。LAHAUSSOIS, Christine, *Porcelaines de Saint-Cloud, La collection du Musée des arts décoratifs*, Paris, 1997, pp. 15-16. オルレアン公フィリップ1世と2世の時代以来、サン=クルー窯製のカップとソーサーが多数所有された。COWEN, Pamela, «Philippe d'Orléans, l'avant garde ; The porcelain owned by Philippe II d'Orléans, Regent of France», *Journal of the History of Collections*, vol. 18, no. 1, 2006, pp. 41-58.
- 32 愛知県陶磁美術館学芸員長久智子氏、およびクーツ氏より、サン=クルー窯製である可能性が高いとのご賛同・ご助言をいただいた。長久氏には、ティーポット (fig. 10) もご教示いただいた。
- 33 この作品 (fig. 8) のモデルは、当初は誤ってボンパドゥール夫人と考えられていたが、現在は逸名とされている。GRUYER, *op.*

- cit.*, n° 475. この他に、同様の茶器が描かれた肖像画に《ル・ブラン嬢》(シャンティイ、コンデ美術館)がある。GRUYER, *op. cit.*, n° 460.
- 34 EATWELL, *op. cit.*, p. 69. 18世紀後半のティーセットの形式は、以下。SAVILL, Rosalind, et. al., *The Wallace Collection-Catalogue of Sèvres Porcelain*, t. 2, London, 1988, pp. 489-495; 前田正明、桜庭美咲、『ヨーロッパ宮廷陶磁の世界』、角川書店、2006年、247-253頁。
- 35 «Déjeuner», dans; HAVARD, Henry, *Dictionnaire de l'ameublement et de la décoration depuis le XIII^e siècle jusqu'à nos jours*, t. II, Paris, 1890, pp. 58-59; «Cabaret», dans; *Idem*, *Dictionnaire de l'ameublement et de la décoration depuis le XIII^e siècle jusqu'à nos jours*, t. I, Paris, 1890, pp. 476-480. デジュネとキャバレの定義の困難さは、以下で考察された。KRIKORIAN, *op. cit.*, pp. 84-87.
- 36 COWEN, *op. cit.*, pp. 52-53. また、やや異なる装飾模様であるが、サン=クルー窯の2客のカップとソーサー、ポットからなるキャバレが以下に掲載された。LAHAUSSOIS, *op. cit.*, pp. 56-57, n° 62.
- 37 陶磁器のように見えるこれらのティーセットは、青緑色や赤色、金彩といった華やかな装飾が施されているのが見てとれるが、同定はなされていない。
- 38 シャルロット=ジャンヌ・ペロー・ド・ラ・エ・ド・リュウ (1738-1806)。1766年からオルレアン公の愛人となり、1773年に身分の違いから正式な結婚は許されなかったため、貴賤結婚をした。
- 39 EATWELL, *op. cit.*, p. 70.
- 40 *Correspondance*, *op. cit.*, p. 363.

[図版出典]

Cat. exp., *Boucher & Chardin, Masters of Modern Manners*, University of Glasgow, Hunterian Art Gallery, 2008 (figs. 1, 3, 4) / ダラム、ボウズ美術館 (<http://bowes.adlibhosting.com/Details/collect/2859>; 最終閲覧日 2016/7/24) (fig. 5) / ロンドン、ヴィクトリア&アルバート美術館 (<http://collections.vam.ac.uk/item/O70836/teapot-unknown/>; 最終閲覧日 2016/7/24) (fig. 11) / SARGENTSON, Carolyn, *Merchants and Luxury Markets. The Marchands Merciers of Eighteenth-Century Paris*, London 1996. (fig. 6) / 展覧会カタログ『紅茶とヨーロッパ陶磁の流れ』、名古屋ボストン美術館、2001年 (fig. 7) / LAHAUSSOIS, Christine, *Porcelaines de Saint-Cloud, La collection du Musée des arts décoratifs*, Paris, 1997. (fig. 12) / Cat. exp., *Les trésors des Princes de Bourbon Conti, L'Isle-Adam, Musée d'Art et d'Histoire Louis-Senlecq*, 2000. (figs. 13, 14) / Cat. exp., *Thé, café ou chocolat? Les boissons exotiques à Paris au XVIII^e siècle*, Paris, Musée Cognac-Jay, 2015. (fig. 16) / 筆者撮影 (figs. 2, 8, 9, 10, 15)